

記念講演

核のない平和で豊かな未来へのバトンタッチ！

～女性・母親・青年と共に学校・地域から参加と共同のネットワークづくりを～

太平洋核被災支援センター事務局長
幡多高校生ゼミナール顧問

山下正寿

かなりテーマが広いので、話の流れを紹介します。

最初に私の生い立ち、学生時代のこと、民主教育の運動、そして高校教師として高校生の指導に関わったこと、特に幡多高校生ゼミナールの活動を通じて私がこのビキニ事件に入ってきた過程にふれます。

ビキニ事件は、先ほどの紙芝居にもありましたように、今日は、お母さんで原告でもあるお2人の方の話を直接、聞いていただきます。そのあと、いま特に、どの団体も青年の後継者の問題が深刻だと聞いていますが、若い世代に関わってきたということで“若い世代にどうつながっていくか、問題提起します。そして最後に、母親運動など、地域のネットワークをどうやって作っていくのかということ——私は53歳の時に教師を辞めまして、四万十楽舎とか黒潮実感センターなどの地域の運動と関わってきた経験がありますので、その教訓から少し問題提起をしたいと思います。

片島で生まれ育った

私が育ったのは、高知県宿毛市の片島という港町です。10メートルちょっと行くと海という家で高校まで育ちました。母親が菓子屋、父親が時計屋を営んでいました。私は6人兄弟の下から2番目でしたが、子どもの時は毎日、山や海へ、みんなで相談しながら徹底的に遊びました。ほんとに、遊ぶことに明け暮れて、学校へ行く暇もないくらいでした。今考えると、その時に創造力がついたようです。実家のまわり50軒くらいの家の中を覚えています。それだけ行き来していたということです。そういう環境の中で育ったことは、私の財産です。そのころ、家の手伝いだけはして、店番はよくやりました。

宿毛市沖の島（高知県西南部にある離島）にマグロ漁民が多くいましたので、船を下りて島に帰る前に私の家でお菓子をたくさん、買っていくのです。日焼けした彼らは、見た目にもイキイキしていて、笑うと歯が真っ白で、明るくて元気がよくて、全くの好青年でした。このとき私は9歳でした。しかし4、5年して、彼らに異変が起きました。まず、首の付け根に大きなコブができたり、白内障のように目が濁り、髪の毛はまばらに白くなるマグロ漁民が目立ちました。また何人かは声が出なくなった。海の上で操業するから元々声が大きいのですが、単にかすれているというより一生懸命絞り出すように出しても、出ないという感じでした。それから、まだ20代30代くらいなのに、表情も急に老けました。「一体この

人たちはどうしたのだ」という思いながら、当時は子どもだから事情が分かりませんでした。後に高校の教師になって調べて初めて、それがビキニでの被爆の結果だと分かりました。その時はもう本当に「何の罪もない青年がなぜ！」「許さない」という怒りがこみ上げました。——これが、私が36年間この問題を追跡していく原点となる体験でした。

早稲田大学に入って考えたこと

私は宿毛高校で、高知県生徒会連合の最後の世代として自治の体験をし「庶民の大学に入りたい」という望みをもち、また「教師になりたい」とも考えていたので早稲田大学の教育学部に入りました。当時の私立大学は、高度成長の中で“企業化”していました。学生をたくさん集めて授業料をたくさんとり、新しい校舎とかを建設していく、そういう時期だったのです。

教室はというと、ここの倍くらいの広さの所にぎっしり、200人か300人くらいが入る教室での授業が多くて、これにはうんざりしました。「何のために大学に入ったのだ？」と。たまたま早慶戦で慶応大を破って優勝したときに、新宿まで行って馬鹿騒ぎして、その後いろいろ自分で悩んで落ち込んだ日が続きました。幸い、中国研究会というサークルに入ってその中で本物の学習をしたということが救いでした。2年生の時、大隈講堂で戒能通孝

氏の「小繫^{こつなぎ}事件」についての講演会があり、聞きに行きました。非常に感銘を受けまして、友人の福田君と2人でリュックを背負い列車で小繫村を訪ねて行きました。「小繫事件」は岩手県の山村の入会権をめぐる地主と農民との間の3代に渡る裁判が行われた事件です。

突然の大学生2人の訪問にも関わらず、第1回世界母親大会に参加された土川マツエさん含め、農民のお母さん方が夜集まって、話をしてくれました。「山に枯れ枝やしいたけを採りに行くことで、犯罪者の扱いを受けた」と語った後で、土川さんが「相手の弁護士さんは有名大を出た人と聞いたが、そんな立派な人が、どうして私たちのような貧しい農民をいじめ苦しめるのか。そんなことを大学で学ぶのですか？そのために知識をつけるのですか？学生さん、どうか弱い私たちのために役に立つように、その学問を使ってほしい」と言われました。夜中の1時近くまで話し、そこに泊めていただきました。翌朝、5時くらいだったと思うのですが、外に出たら、朝もやの中で昨夜発言した婦人が鋤をもって畑を耕していました。私はすごい衝撃を受け、立ちすくみました。「こういう人のために自分の学びを返してゆかなくてはいけない」と強く心に刻んだ覚えがあります。そこから本気で大学で学ぼうという気持ちが強くなりました。

学費値上げ反対闘争の中で

3年生の時に早稲田の授業料が上がるということが突然発表され、そこから授業料値上げ反対の運動が展開されました。自治会を再建して教育学部の自治会の副委員長として、学生大会を開き、投票をしてストライキ権を確立し、運動を展開しました。

いままで余り話したことの無いクラスの仲間とも夜を徹して「何を学ぶために早大に来たのか」を語り合ったこと、これがすごく勉強になりました。

早稲田というのは庶民の大学というだけあって、理学部や商学部、法学部、文学部の人たち——それこそ、北海道から沖縄までいろんな所から来ている人たち——そういう人たちとドラム缶の火を囲んで論議を重ねました。この運動がなければ絶対に出会わないだろうという、初対面の学生たちと論議をしたことが、私にとってはものすごく勉強になりました。

ところが総長を中心とする大学側は、譲らない。バリケードが張り巡らされていたのですが——これは過激派の学生がやったことです——。これが150日間も長期化した原因の一つです。こうした中で今度は過激派が本部閉鎖するという動きをした結果、大学側が機動隊を要請し、学内にとうとう機動隊が入るという事態になりました。

私もこの時は、何回も「来るぞ、来るぞ」と情報を流され、その都度飛び起きて校門の前にスクラムを組んで座り込むことのくり返しで、夜明けまで寝かさないんですね。——ついに機動隊が来て、両側から警官に引っ張られて装甲車に乗せられ、200数十名の学生が東京留置所につれて行かれました。ヘリコプターは飛ぶし、道路は遮断されるし、すごかったです。これが権力の暴力的体質だと思いました。その後、バリケード撤去の方針を学生大会で出したあと、今度は個別に、自治会の活動家に対して攻撃が来しました。

私も必修の日本教育史の講義を受講中、教授が私のそばへ来て、「山下君、君はこの教室にいる必要はないよ」と言う。「どうしてですか」と聞いたら「胸に手を当てて考えてみなさい」と言われました。授業が終わってすぐに前に行って「ちょっとみんな聞いてくれ。実はいま、こんなことを言われた」と言うと、みんなが教授を取り囲んで抗議すると「あ、山下君、元気やったかね？」と訳の分からないことを言い、逃げ出しました。翌日から私は担当教授の部屋に日参しました。「あなたは教育者で、私は学びたいからこの授業を受けています。指導する責任があるんじゃないですか」と追及すると根負けして「それでは、早大闘争についてレポートを出せ」と言われました。「わかりました」と、すぐに「日本教育史における早大闘争の意義」をレポート10数枚書いて提出しました。——結果は「可」で、卒業できました。

臨時教員時代のたたかい

その教授からは「君は東京の公安からマークされている」と言われました。高知に帰ってきたら、駅で偶然、高校の同級生だった県警の刑事に出会い「山下君、大学では派手にやったようだな」と言われました。「あ、これはもう、連絡が入ったようだ」と思いましたが、やはり、教員採用試験は不合格で、臨時教員からスタートしました。

私はこの時、自分が学んだことを潰されようとしていることを感じたので、これは絶対に許せないと思いました。学生時代に権力の体質を学んできて、強引に性急にやってはダメだ、そんな甘いものではないと考えました。攻撃の性質をきちんと科学的に分析して——臨時教員の場合はなぜそうなっているかということ进行分析するため資料を整え、社会問題として訴える、自分だけの問題ではなく高知県にとっての子どもの教育を巡る社会問題であると広く県民に訴える方法が一番大事である。そのためには、自分が成長しなくてはならない。常に自分がたたかいながら学んで成長しているなという実感をもっていくこと、そしてその仲間を広げていくことだと。終わりがありませんからね。だんだん広がっていくだけだから負けな

い、という発想で「教育に臨時はない」というテーマをもって県下に4サークルの結成をよびかけ、展開しました。

同時に、学生時代に関わった「教育系学生ゼミナール」という運動のリーダーたちが僕と同じように教員採用試験で思想差別を受けていることが分かっていたから、これは全国展開しようということで、新潟から始まって沖縄まで臨時教員ネットワーク形成のために、走り回りました。その時言われたのは、「高知の臨時教員はなんで馬鹿みたいに明るいのだ？」ということでした。「そりゃ、楽しいたたかいをしているからだ。イライラしていたら絶対勝てない、だからいかに楽しんで広げていくかということを中心にして展開するのだ」といつも思っていました。

そういう広がりの中で、高知県でも200余名の臨時教員が3年計画で採用され、私も最後に採用されました。組合に入っていると採用されないというので県教組の組合員は減っていたのですが、サークル活動を組織し、つながって学んで支え合っていましたから、組合員もふえました。当時、高教祖370名だったのが、その後、私が高教組委員長をやらせてもらった時は1,000名に達しました。

そういう運動は、攻撃の中心から、ストレスから逃げてはいけません。ストレスの根っこに向かっていくということで、大きなストレスは解消していく。喜びに転換していくと自信がついてくる、怖いものは、少なくなる。

教師の「怖いもの」は、地位と評価。校長、県教委からの見方、評価に非常に弱い。しかし、そういうものを捨てて、子どもたちが成長するということを楽しめれば、そんなに怖いものはない。「欲望を持てば、それを失うことを恐れる」とは、よく言われることだと思います。

高校教員として追求したこと

採用になって高校教員として今度は私が、高校生たちと一緒に自治を作っていく番になりました。採用から4年後に高教組の執行委員、当時青年部書記長でしたが、一番やりたかったのは、私自身が高校生最後の年に経験した県生徒会連合の伝統である「自治」です。生徒会自治を復活させたいという思いが強くなり、高校生討論集会——後には「高校生のつどい」というものになりましたが、これを全県で広げるということを中心にして展開しました。大変な妨害がありました。県教委から「高生連」の復活になるんじゃないかとか、中心になった高校生の進路を保障しないような圧力があつたり、いろいろありましたが、若い教師ががんばって500人くらいの集会を開きました。また、授業を改革していく「春の講座」を開いて教師が生徒の意見を聞きながらいい授業を実践していく取り組みがされました。それから、ちょっとがんじがらめになっている「校則」の問題を解き放していく、生徒会を中心にした学校行事を広げていくという取り組みをしました。その中で若い教師が元気になっていくということを体験できました。

ただ、学校は規則が多い。何をやるにも届け出、報告とか義務づけられ、あいだに教務主任、クラブの顧問が入りますと、もううるさくて、自由に動けない、そういうこともあったので「幡多高校生ゼミナール」(幡多ゼミ)という社会教育・生涯学習サークルを立ち上げ

たのです。学校とは独立して、生徒が本人の希望で自由に集まって自由に活動する、それを教員がボランティアでサポートするというスタイルで進めました。

そういう場所を持っておかないと、学校だけで変えようとすると、組合員が多くて校長や地域の理解もある、周りの環境が好条件のところでないといけない。そういう学校は限られています。組合員が異動していくたびにだんだん弱っていく。教師が誇りを持てるような実践を積んでおかないと衰退してしまいます。

ビキニ事件との遭遇

幡多ゼミ結成から2年後、1985年の広島・長崎の被爆40周年の年にビキニ事件に遭遇するわけです。小筑紫町の「藤井馬さん」が長崎の被爆者だと聞き、訪ねました。すると、「うちの息子は長崎でも被爆したけど、ビキニでも被曝した」と。長崎に行って被爆して、宿毛に逃げ帰って、自分が働かないといけないということでマグロ船に乗って――。同じ船に乗っていたどの人に聞いても「すごく真面目な人だった」と。皆が陸に上がって飲みに行くときも船に残って本を読むような人でした。マグロ漁民の中でこれほど親孝行な者はいないというくらい親思いの人でした。出航前には必ずお母さんには手紙を書いていた。その彼が最後には力尽きました。操業中、大きな入道雲を指して叫んだり（原爆の雲が脳裏に入ったと思うのですが）、出航直後に海水に飛び込んだのを救出されたりしました。その後に、久里浜病院に入っていたのですが、メモを残して自ら海へ入水自殺したのです。

「おばあちゃんの代わりに事情を調べようじゃないか」ということから調査がスタートし、幡多ゼミがビキニ事件に関わり始めました。「高校生ゼミナール」は東京の旅で、第五福竜丸展示館を訪れました。一番印象に残っているのは、当時マグロを検査した東京都の岡野さんという職員の方への質問です。その時高校生がこう言ったのです。「なぜ人を調べなかったのですか？ なぜマグロを調べたのに、漁民を調べなかったのですか？」スパッと本質を突いた質問でした。漁民を調査しなかった理由は、東京都から派遣された係員はマグロの検査をする職員で、医者ではなかったからです。

翌日、亡くなった第五福竜丸無線局長の久保山愛吉さんの妻・すずさんを静岡県の焼津に訪ねました。ビキニ核実験被災は、汚染マグロが3月から12月の検査中止の時まで、全国の太平洋岸すべてのマグロ水揚げ漁港で検出され、放射能汚染が、食事や子どもの健康問題として全国に波及し、母親大会結成のきっかけになりました。すずさんは、第1回日本母親大会で「主人が水爆実験のために殺されたのは、いったい主人がなにをしたのでしょうか、なぜ死ななきゃいけなかったのでしょうか」と強い抗議の声をあげられました。

高校生が訪ねていった時は、原水爆反対運動が分裂したこと、地域の不理解もあり、すずさんは、あまり人に会おうとしない時期でした。でも、初めて高校生に会ってくれました。その時に「悔しい。見舞金を第五福竜丸だけが貰ったことで、周りからねたまれました。第五福竜丸の船員ほど酷くはないけど、実験の周辺海域で操業して病気になっても他の船には何の補償もないのに、福竜丸だけ見舞金を貰ったというのでねたまれたのです。非常に悔しかった、辛かった」と言っていました。これが権力のやり方で、福竜丸については被曝が世界に明らかになって隠すことができない、だったら見舞金で解決して他の船と分断、孤立さ

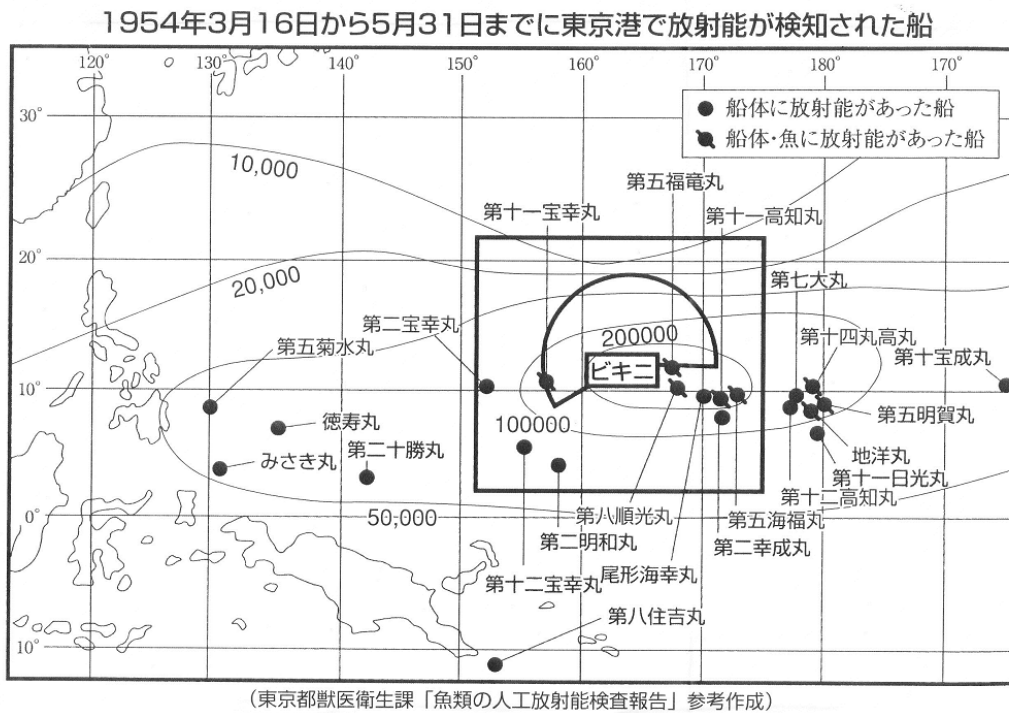
せようとしたのです。

この時、庭に植えられていた愛吉さんのバラの挿し木を高知から手紙を出して翌年受け取り、2019年の静岡の全国母親大会で、幡多ゼミOBの橋崎律子さんがそれを里帰りさせました。

ビデオからわかること

少しビデオ（DVD「核被災と核兵器禁止条約」）を見てください。

マグロ漁船の分布図を見てください、被曝の時、この中にある第7大丸ほかいくつもの高知のマグロ船がビキニ海域にあったことが分かります。



インタビューする高校生→発表する高校生、3月1日の被曝→2回目の被曝、翌年の見舞金受け取り、操業海域を覆う実験区域→98隻の漁船の操業のことなど
[6分間の映像]

第5福竜丸が焼津に帰った後も、他のマグロ漁船はマーシャル海域に行っています。これは一体どういうことだと思いますか？ まったく操業を止めてない。これがビキニ事件の、重要なところ。水産庁は止めなきゃいけないのに、止められないまま、実験がくり返し行われている海域に何度も何度もマグロ漁船が行っているのです。

つまり国は、漁船員の安全を確保するための対策をとっていない。そして3月から12月まで時間の経過と共にプランクトンから始まる食物連鎖の結果、マグロの汚染がとても深刻な事態になったその12月に、突然、国は検査を中止した。ここが重要なところ。

裁判で争っている点は、検査打ち切りによる国の責任を問うというものです。打ち切られ

た後に水揚げされたマグロは、検査なしに市場に流通しています。一番危ないのはカツオで、カツオの内臓、塩辛を食べた人は、激しい下痢をした可能性があります。アメリカはカツオを食べない、マグロだけを輸入している国だから、「マグロの放射能検査をせよ」と指示を出したのです。

ビキニ実験被災追跡の中で

裁判の中で新しい資料が次から次へと出てきました。中でも一番驚いたのは、外務省の文章です。三.として掲載している「戦犯釈放」の件。なんでビキニ事件の交渉の時に戦犯釈放の話が出るのかと思うのですが、日本は当時、「戦争犯罪人を釈放せよ」という運動を起こしていた。そしてビキニ事件解決の取引条件として使われ、その後、戦犯が巣鴨から釈放された、その人物が日本の保守勢力の土台になった。岸信介はその時政権政党の幹事長で、この動きに乗かって首相になっていく。自由民主党形成の土台になったのは、このビキニ事件だったのです。

三、戦犯問題については大量釈放は無理なるもクレメンシーボード(戦犯恩赦・仮釈放監察委員会)にかける条件としての服役期間を短縮する等緩和措置を講じ漸次釈放のことに取計らいたく但し例えば生体解剖関係等人道上如何にしても許し得ざるケースは日本政府において国民に対して事情を明らかにし釈放出来ざる理由を発表することとするも一案なるべし

【注】昭和30年、日米政治結着をした内閣は、鳩山一郎首相、重光葵外務大臣、岸信介日本民主党幹事長(いずれも元A級戦犯容疑)「A級戦犯」は昭和31年「BC級戦犯」は昭和33年までに赦免、釈放された。

また、円借款の18億ドルを免除して15億ドルにした。反共の防波堤として日本を位置付けるという流れの土台を作った。大きい事件だったのです。こういうものが背景にあるから簡単には認めようとしな、ということが調査を通じて分かってきました。

四、ガリオアについては、Natioani Advisory Council とも話合いたるが急速解決の必要を強調しおり米案(7億3百万ドル)に対する日本対案を御提示あらば考慮に吝(やぶさか)ならずその上にて何とか至急取纏めたく本件解決により今後の借款問題交渉に資するところ少なからざるものあるべし 【注】ガリオア貸与金(7億300万ドル)の返済を日本側が決定できなかった。ガ

リオア資金：占領地救済政府基金(GARIOA) エロア資金：占領地経済復興基金(EROA) 日本に対しては総額18億ドルの援助が行われ、うち13億ドルが無償援助となった。戦後共産主義陣営との対決が必然的に生じるなかで、アメリカが早期にドイツや日本などを復興させ、対共産主義の防波堤とするための政策ではあるが、日本の戦後復興が成った大きな要因である。

それでは、直接この裁判の原告をされている二人の方に証言・発言をお願いしたいと思います。よろしく申し上げます。

証言その1 増本 美保さん

私はビキニ被災国賠訴訟の原告としてたたかっておりました増本和馬の妻、増本美保と申します。

夫・増本和馬は2019（平成31・令和1）年12月5日、肝門部胆管癌のため、志なかばにして死亡しました。1954（昭和29）年、アメリカがビキニ環礁で行った水爆実験により被災した夫の遺志を引き継ぎ、裁判をたたかっています。

今年5月には、同僚であった方が大腸癌で亡くなりました。また一人、被災された方がこの世を去られました。非常に残念なことです。

私は18歳の時から、看護師として医療現場に従事してきました。完全撤退は77歳でした。そこで学んだことは、病気に対し、昔も今も一貫して言えることは、「早期発見・早期治療、そして予防に勝る治療は、ない」ということに尽きると思います。そのためには、その病気の原因・誘因をきちんと知ることが重要となります。

夫は、若い頃から様々な病気とたたかってきました。それも血縁者が誰も罹ったことのない病気です。当時、身体が非常にだるく、仕事を辞めたいと思ほどだったそうです。そして肝臓肥大、白血球増多、前立腺癌、狭心症で入退院を繰り返し、2019（令和1）年8月には胆管癌の告知などです。

被災当初より第5福竜丸の乗組員のように、健康チェックをし、追跡調査をしてもらえば、このような訴えを起こさなくても被災による疾病と認定されたのではないかと思います。乗船以来、船員に対して年1回義務づけられている船員手帳に記載されている「健康診断証明書」の内容は、身体測定・視力・聴力・ツベルクリン反応・胸部レントゲン所見のみでした。1996（平成8）年分の手帳から、やっと血液検査が加わっています。

私が被災を知ったのは、国賠訴訟の動きがあってからでした。子ども・孫たちは、父親・祖父が放射能により被災していたことを知って、自分や自分の子どもたちへの影響を心配しています。長男は2018（平成30）年3月「基底細胞癌」に、孫の一人は2013（平成25）年5月に「脳腫瘍」に罹患しましたが、いずれも治療し、経過良好となっております。

放射能は、現在の医療には診断・治療にとって欠くことのできないものではありますが、使い方を間違えれば、人体にとってどのような形であられるか分からない、恐ろしいものです。核兵器は、絶対に許してはいけないものです。

証言その2 下本 節子さん

高知市の下本節子です。先ほど紙芝居でも紹介されておりました下本____の娘です。

父は室戸のマグロ漁船「第7大丸」で働いていた1954（昭和29）年3月1日、ビキニ水爆実験で被災しています。私が遺族としてこの事件に加わったのは、2016（平成28）年2月の船員の労災申請と5月に提訴した国賠訴訟からです。

放射能の危険性を訴え始めたのは、2011（平成23）年3月11日の福島原発事故の翌年からです。伊方原発の廃炉を求める「未来を考える脱原発四電株主会」の人たちと四国電力の株主総会に毎年出席して、ビキニの核被災のことを発言してきました。放射能は危険です。伊方の再稼働には反対ですと。放射能の危険性を知っている者として黙ってはいけないという思いがありました。

労災申請や裁判に関わったこの5年間を振り返ると、本当にたくさんのことを勉強させてもらったし、たくさんの人との貴重な出会いがありました。

山下先生を生で見たのは、『放射線を浴びたX年後』の上映会の時でした。宿毛で藤井節弥さんや亡くなった船員さんのお墓参りをしたときは、幡多ゼミ会館で宿泊させてもらって、お酒を飲んでしゃべる山下さんの話、特に吉永小百合さんをネタにした話には、笑い転げました。

その時取材に来ていた若いフォトジャーナリスト・小原一真（おぼらかずま）さんとも知り合い、私の父親の人生を通じてビキニ事件を報道するという企画に協力しました。父の船員手帳や東京中野の無線学校の卒業アルバムが見つかったのも小原さんのおかげでした。

「日本科学者会議四国地区」のシンポジウムで発言した時、高知大学の森さやか先生と出会い、昨年からゼミの学生さんたちともつながりができました。

また昨年8月には、『ここが家だ』という第5福竜丸のことを絵本にして出版されているアーサー・ビナードさんの講演会に参加させてもらって、紙芝居『ビキニの海のねがい』の上演やスピーチをしました。

その時知り合った「みんなのデータサイト」（3・11福島原発事故後、日本各地で立ち上がった「市民放射能測定室」）の事務局・東京の中村奈保子さんとも知り合いになり、先月9月には「日米しゃべり場」という、核と平和をテーマにオンラインで話し合う日米の市民・研究者のサークルに、ゲストスピーカーで参加させてもらって、高知県の労災訴訟のことなどを話す機会がありました。

私は子どもの頃、学校での授業で、社会科が一番苦手でした。年号とか地理とか、暗記する授業だと思っていて、全然面白くなかったです。ところがビキニ事件のことは、船員さんの話を聞きに行ったり本を読んだりしながら、必死で勉強しました。

TVニュースに私が出ているのを見た近所の人に「水爆って、海で実験するき、水爆って言うが？」と聞かれて、いやさすがにそれは違うだろうと思って、原爆と水爆の違いを勉強したり……知らなかったことがいっぱいありました。当時の歴史や政治のことを調べたりもしました。

山下さんに「幡多ゼミの生徒にしてください」と頼んで「特別幡多ゼミ生」にしてもらいました。山下さんが言われるように「知りたいことを学ぶ」、そして発言する場があるということが本当に実のある勉強だと実感しています。

核兵器禁止条約の成立に大きな働きをされたサーロー節子さんの著書『光に向かって這っていけ』も、一気に読みました。

一番心に残ったのは、第5福竜丸事件がニュースになった時、サーローさんは22歳で、アメリカに留学したばかりの時だったということを知りました。「私は敵国の人間だった」の項に、米国の新聞社から取材を受けた時のできごとが書かれています。一部を紹介します。

—— 質、量、威力ともに核兵器を増強している米国の現状を批判した。そのことが思わぬ波紋を呼んだ。翌日から「真珠湾攻撃を忘れるな」「米国がいやなら日本に帰れ」、さらには「殺すぞ」と脅迫する手紙が次々と届いたのである……（中略）……しかし自分の発言が悪かったとは思えなかった。1週間ほど悩み抜いた末、決心した。排斥的な言動には屈しない。沈黙しな

い。被爆体験から導き出した私の思いを語り続けるのだ、と。被爆者として北米で生き続ける、最初の一步を踏み出したのだった。—— と、綴られています。

さまざまな国の人たちが暮らす北米で核兵器禁止を発言することの困難さや、日本の戦争の加害性に改めて気づかされた文章でした。

衆議院選挙の投票が10月31日に決まりました。戦争の加害国であることに向き合いながら、「核兵器禁止条約」に署名する日本政府にする責任が、私たち国民にあります。私もビキニ被災をたくさんの人に伝える責任を果たしていきたいと思っています。

被災船員救済の必要

こういう原告の方ががんばりもあって、時効で門前払いをされるような裁判だったわけですが、マスコミも応援してくれましたし、梶原弁護士の踏ん張りもあって、審議に入ったのです。そして、結果的には裁判長は原告の請求を棄却しましたが、漁船員の被曝は認めました。何らかの救済措置をすべきだ、今の広島・長崎の原爆の法律（被爆者援護法）では救えない、だから行政、司法も考えるべきだという提案をしました。

画期的なものだったのですが、この過程で、7人の原告と遺族が亡くなりました。非常につらいことで、やはり救済を優先しようということで、船員の救済のための労災保険の適用を求める裁判、それからもう一つ、政治決着したためにほとんど補償をもらえなかったということに対し損失補償をせよという裁判—この2つの裁判を東京と高知で、まもなく開始します。このたたかいは、ICANの川崎哲さんは、「核実験被災の解明で世界の先頭を走っている」と言われました。

核実験というのは、国家秘密です。実験する国は被害が分かったら実験を中止しなきゃいけないから。特にアメリカは未だに秘密にしています。そういう中で核実験の被害は、世界中に広がっています。大気圏での実験だけで500数十回、地下実験を入れたら2,000回、アメリカ、ソ連、中国、オーストラリア、太平洋諸島、だいたいここで被害を受けた人たちが中心になって核兵器禁止条約の運動が広がりました。（条約は2017年7月7日、国連で圧倒的多数の賛同により採択され）、それが2021年1月、ついに、発効しました。「条約の第6条・被害者支援と環境改善」の項に、こうあります。

締約各国は、核兵器の使用や実験に伴って悪影響を受けた管轄下の個人に関し、国際人道・人権法に従って、医療ケアやリハビリ、心理的な支援を含め、年齢や性別に適した支援を十分に提供する。社会的、経済的な面についても同様である。

これが国際法になったのです。日本が批准すれば救済対象に入るのです。それを日本政府は恐れています。

核廃絶への新たな前進

ごく最近に入ったニュース、かいつまんで話します。

一つは政府が「黒い雨」裁判の控訴を諦めたことです。この裁判の時に一番活躍したのは、気象研究所にいた増田善信さんという研究者です。実はビキニ事件の時にこの人が「こんな大きい爆発実験をすると噴き上がったほこりが北半球にぐるぐる回って、太陽が閉ざされて、「寒い夏」が来る」という予言をしたのです。その通りになりました。それくらいビキニ水爆実験の時に噴き上げた塵は大きかった。なぜかというと、ビキニは地上50メートルくらいの所で爆発させたのだから珊瑚礁が溶けて、吹っ飛んだのです。しかも水中でもやりました。5回の実験で北半球に放射能がものすごく降り、そのほこりを吸い込んだりしたことで肺にたまり、血液に流れたりして身体内部に放射能の影響を受けました。この「内部被曝」が、初めて認められた——画期的な裁判内容です。これを認めて控訴しなかったということは、内部被曝は認められ、それがビキニに適用される可能性は充分にあります。

もう一つは、大気圏核実験中止になった契機になった「アメリカの子どもの歯のストロンチウム90分析データ」開示の問題があります。実は、大気圏内の実験を中止したときケネディ大統領が提案したことです。1963年に生まれた子ども30万人の歯のストロンチウム90は、実験前に生まれた子どものそれに比べてはるかに多いことが分かって、これは放っておくと子どもが癌にかかり死亡し、子孫に大きな影響を与えるということが分かりました。それでケネディが説得してロシアとイギリスに働きかけて、大気圏内の実験は中止になりました。中止になったけどその原因となるデータは明らかにしなかった。今になって、米軍の倉庫の中に10万個分の子どもの歯が見つかって、科学者に分析させています。それで科学者がデータを報道した。すぐに山根和代さんが翻訳してその日のうちに私の所に送ってきてくれました。つまり、隠していたデータが出始めた、これが核兵器禁止条約の大きな力です。アメリカの市長会議では核兵器禁止条約に参加せよと決めたとし、アメリカ自身も被曝しているということが最近分かってきました。その影響だと思えます。

もう一つは、米国の「被爆者保障法の改正法」の動きがあります。これは、ビキニ実験の時、観測のためにグアムには12,000人くらいの米兵がきましたが、船がものすごく汚染されたから海軍の基地で洗うという処置をしている、そこから救済の動きが出てきて、法律で今、審議されている、それが通れば確実にビキニ事件被災者にも関係してきます。

そして、この11月にピースボートが「世界核被害者フォーラム」という会議をオンラインで開催することになっていて、高知も呼ばれて、いまその準備をしているところです。

先ほど見てもらったビデオ（『核被災と核兵器禁止条約』）中心に10分間報告される予定です。

さらに幡多ゼミが中心になって『核被災を追跡する高校生たち』という本を出版し、国内の図書館に普及するよう、いま準備中です。「36年以上も前から核の問題を追跡した高知の高校生たちが、この闇に隠れた巨大な事件に挑んだということは大きい」という評価が国際的に聞かれはじめました。『ビキニの海は忘れない』という映画を海外で上映したいという希望も届いています。

来年3月に、批准国を中心にした核被災者の救済のための国際会議がオーストラリアで開催されます。そこに向けて高知からどう働きかけをするかということが議論されています。

青年へのバトンタッチをどうすすめるか

1、今、青年の社会的参加、活動分野が細っています。調べてみたのですが、例えば早稲田の自治会は、「自治会」ではなく「学友会」という名前になっていてびっくりしました。そして「全学連」としての運営ができなくなっています。高知大学も同様ですね。大変なことですこれは。——大学で学ぶことを中心に「自分で学ぶ」、「自治」が基本であるべき大学が、こういう状態です。

そして、青年の組織も大きく細ってきています。労組青年部も独立的な運動がだんだん少なくなっているようです。

青年にどう運動をつないでいくかということが全ての労働・民主団体の課題になっているのにこの問題が正面に座ってなっていないようです。今、準備しないと大変なことになります。いま全ての民主団体が「運動を継承していく」ことにかかなり比重を置いて取り組まないと、より深刻な事態になります。

政府がどんなに悪政をやっても、まず安泰でいられるのは、青年が批判的に動かないからです。麻生副総理が「若い者はインターネットを見ていればいい、新聞を読まないように」と言います。世界では、勉強して若い世代が政治問題を、環境問題を含めてどんどん行動していますが、日本はどうですか？

やはり今、大切なのは、青年を対象にした日常組織です。大学生は自治会、高校生は生徒会に自分が参加をして、そこで要求実現運動を通じて、自分が変わったという体験をすることです。いま青年が選挙に行かない理由の大半は、「行っても無駄だ」「変わらない」という諦めが先行するから、変えた体験を持ってないからと言われます。「変える」体験を学校現場の中で育てていくことが非常に重要です。

自治・自立をきちっと教えていくことが教育の課題でもあります。教員を多忙化に追い込めば組合活動は大きく後退するというのを、権力はよく知っているのです。教師は真面目だから、多忙化で追い詰めていけば孤立して活動を停止すると。

教師が自分の問題、自分の家庭、生活、健康の問題で余裕がなくなる。子どもと接する時間にも余裕がなくなり——自由に発想して、子どもと一緒に、子どもより先に立って感動するというのが教師であるはずですが、その余裕が失われているということは、教育に大きな影響を与えるばかりじゃない、日本の未来に大きな影響を与えるということ、教師自身が告発できるように支援すべきです。私たちがかつて臨時教員の運動をしたときも、自分の問題だけじゃない、社会問題として取り組んできたことが大きく組織を変えて、力になってきたと思うのです。

多忙化は、管理職を含めてみんなに影響を与えています。だからこの問題を正面に据えて大きく取り組めば、組織は大きく拡大する、間違いなく組合員は増えると思います。

そういう意味で母親運動だとかさまざまなネットワークが直接、現場の教師の声を聞き取って、教育委員会に、議会に訴え、社会問題として解決していくべきではないかと思

ます。特にコロナの時、全国的の子どもたちが真っ先に犠牲になっています。コロナだから「学校が批判されないように」というので、何でも制限・制約して、とめてしまうというやり方、これは管理教育です。コロナで大変だからこそ、学校に来るよりも、子どもは自然の中に置いた方が安全です。なぜ発想を転換してそれをやらないのか。この時こそ、普通の学校の授業では学べない、生産している農業、漁業、林業、そして自然の豊かな中で、人々がどういう生き方をしているのかNPOをはじめ実践している人たちの話を聞く、チャンスです。私は四万十楽舎と黒潮実感センターの理事をやっていましたけど、山の中の子が柏島の黒潮実感センターへやってくると、もう目を輝かして…興奮して寝ないのです。「おっちゃん、まだ朝来んの？」って。山の中で生活している子が海へ行って、船に乗って、ウミガメを見て、洞窟の中へ船が入り、ライトで照らして夜の魚を見たら、子どもたちは興奮します。それと同じように海の子が川へ行って、川の水の透明さと泳ぐと川では身体が沈むということやエビを捕るなどの体験——高知の豊かな自然の中で様々な体験をする、今、チャンスです。——母親運動でぜひ要求してほしい。

批判されるのが怖いからじっとしているというのは、管理教育です。あの3・11の津波で流された、犠牲になった学校、「校長がいないから連絡取れない」と待機していた学校などです。——管理教育では子どもの命を守れないときもあります。

最後に、「**ピクニデーin 高知**」が、2022年・来年の5月6日から8日に開かれます。「青年への活動のバトンタッチ」がテーマです。今朝も、学生さんが11名参加して実行委員会を持ちました。事前調査・フィールドワークや全体会・シンポジウムを行います。高知らしい「若い世代にバトンタッチする運動」が始まっているということを示すためにも、ぜひ参加してほしいと思います。

女性・母親・青年の参加と共同のネットワーク

女性のネットワークの取り組みについて、思いついたことを述べます。

○情報開示請求を必ず運動に入れてください。

—— 地域課題については行政への情報開示請求を！

行政に話をしたときに「そんなことはわかりません」とか「ないと思います」とかよく言いますが、そういう時、正式に、情報開示を求めてください。そのことによって行政は動きますから、出てきた資料は説得力ありますから、大きく変わるチャンスになります。それをぜひ活用してほしい。

○地域の報道関係者には、常に情報を丁寧に送ってください。

——地域の報道関係者には、積極的な働きかけを！

母親運動がどんなことをしているかを常に知らせる。話をし、そして参加を呼びかけます。そうすると逆に、どういう取り組みをすれば報道にのせられるかということを教えてください。『絵になる取り組み』をする、同じパターンで運動を発想しない。こういう運動をやるのだったらこうなると、県民が見ているんだということを出発しながら、進めることは、運動のマンネリ化を防ぐためにも、地域の情報関係者にも大事だと思います。

○運動を広げ、立体化しましょう。ネットワーク化を！

例えば、皆さんは子ども食堂や大学生への食料支援をされています。本来は行政がやらなきゃいけないことを、活動されています。しかし、食の提供から、「この食料を持ってきてくれている人を一緒に訪ねていきませんか？」と生産者につながる、「一緒に収穫作業してもらえませんか？」などと呼びかける。そのことを通じて今の子どもたち、大学生が見失っている「生産者とのつながり」を学ぶ場を作ってほしいなと思います。

○「大学サテライト」、「地域学講座」など、地域の課題を学問化しましょう。

——大学・大学生との地域課題解決に向けた参加・提案型学習を！

地域の課題をもう少し学問的に追究するためにも大学と提携して講座を開く。いま、サテライトが高知大学にできています。安芸が活発にやっているようですが、他の地域ではこれからのようです。大学の持っている知識、地域の課題が見えるようにぜひ、そのネットワークを生かしてください。

大学生がきたからといって喜ぶだけでなく、学生が持っている力を生かしてください。例えば四万十楽舎では、愛媛大学と高知大学の農学部生を呼んで、鹿のジビエを研究しました。大学生は「鹿は群馬県ではチャーシューとして使っています」といった情報を提供して、地元と交流しました。そういうことをする時期です。大学の活用と言うことも、ぜひ考えてほしいと思います。

○移住者の受け入れ、その個性をとりいれよう。

——地域の多様なネットワークへ参加呼びかけを！

移住者は若い人が多いです。しかも地域にこだわらない。いいものはいいいという見方をして参加してくる可能性があります。

移住者はこれから増えてきます。コロナ禍のあと、大阪、東京には若い人は住みにくくなります。どんどん移住する人が出てくるので、受け入れる体制を地方で考える。お母さんの取り組みを移住の若い人に伝えて、その人の持っている専門性を生かすようにする。「自分の専門性が生かされる！」という喜びを感じてもらい、それを続けてほしいと思います。

○地域資源の活用に青年・移住者や学校・協同組合と連帯しましょう。

——移住者や学校、協同組合が連合して新しい取り組みを！

その一例が避難所です。避難所対策から入っていく方法が地域を変えるチャンスです。そして避難所に長期滞在できるかどうかの問題です。せっかく命を救われた高齢者が生き延びられるかどうか。福島では2,000人近い人が避難所で亡くなっています。それは避難所の生活が非常に厳しく、大体平均6回も移動しているからです。

長期滞在できる避難所、学校が多いですから、学校の中に炭を、薪を置いて、普段から学校で使う体験を親子で積んでおきます。そして、いざというときに、自然エネルギーの活用で、電源を切らさない準備が必要です。

緊急の課題でもあるし、避難所対策から入っていくことが地域を変えるチャンスです。

これで問題提起を終わります。ありがとうございました。